

登山者のより安全な登山と三俣山荘に おける診療設備の充実化を目指して

代表者 鬼頭 里佳 (医学部医学科3年)

1. 目的と概要

このプロジェクト事業は、北アルプスの三俣山荘に併設されている診療所の診療器具を一層充実させることで診療所の環境をより良くすることを目的としたものです。更に登下山中の登山者の緊急事態に備えて補助器具を導入することで、より迅速に対応できるようにし、更なる登山者の安全を確保することを目的としました。

2. 実施期間（実施日）

平成25年7月25日 から 平成25年8月26日 まで

3. 成果の内容及びその分析・評価等

このプロジェクト事業は、近年メディアの影響もあって登山に関心をもつ中高年の人が増えてきつつあるなか、登山に関する知識や事前の準備が不十分なまま登る人も少なくなく登山中の怪我や病気にかかる人が増加する傾向にあることに着目して、その改善を図って三俣診療所にて実施されました。

登山道では、細く、険しい道など危険な場所も多く、実際今までに死者も出ています。道中で怪我をして動けなくなっても、診療所は標



↑三俣山荘からの景色（鷲羽岳）

高の高いところにあるためそこまで運ぶことは極めて困難です。そこでそのような不慮の事故が起きた場合に備えて、一時的に防寒や雨風から守る避難場所を確保することが大事だと考え、モンベルU.L.チェルトを購入しました。緊急時にこのチェルトを使用することで、傷病者の体力の低下を防ぎ、救急隊が来るまでの間、安心して待つことが出来ます。実際、昨夏に頭部外傷により、身動きがとれない登山者にチェルトを貸し出し

て救助にあたったとの報告がありました。当日は悪天候でヘリコプターは飛ばず、人力搬送も人出が足りなくて出来なかった状況だったようです。この一件からもチェルトがいかにも有効なのかを実感できます。今後も更に人命救助に役立てるために登山者への貸出がスムーズに行えるよう努めていくつもりです。

チェルトの他には、登山用ステッキを購入しました。これは、長い登山中における膝や足への負担の軽減や、治療後の安全な下山に役立つと考えたからです。実際に使用した人の意見を聞くと、雨で川が増水している場所や、雪溪の上を通るときにステッキで足を支えることでスムーズにその場所を歩くことが出来たようです。特に体力のない女性や年配の方に好評でした。長年ステッキを使ったことがない人や初めて登山をされる人が使う時に、最初は慣れずかえって邪魔になる場合もあるので、効果的にステッキを使用出来るようにするため、私たち学生が積極的にステッキの使用についての知識を深めていく必要があります。



↑登山用ステッキの使用風景

三俣診療所は、北アルプスの交通の要所に位置し、毎年怪我を負った方や病気を患った人が訪れるため欠かせない存在です。



↑夜間の診療風景

そのため、その診療環境を改善してより質の高い医療を提供することも重要です。山荘では昼間のみ発電しており、夜間は電源が落ちて真っ暗になるため、ガスランプや個人装備のヘッドライトしか光源がありません。そのような時に救急患者が来ても対処することが難しくなります。そこで LED ランタンを取り入れることで、夜間の診療活動の範囲を広げることが出来ました。十分な明かりを確保することで、来院患者さんも

安心して診療を受けることが出来ました。また、従来のガス式とは違って LED は長持ちするため、替えのガスカートリッジを持っていく負担を減らすことが出来ました。

最後にテレホンカードですが、去年に引き続き申請した理由は、やはりそれが診療所と下界の医師との連絡に欠かせないものだからです。山では携帯電話の電波圏外である場所が多く、三俣山荘では衛星回線を使った公衆電話を備えています。三俣診療所は、班交替で参加する学生とボランティアにより運営されており、常に医師がいるわけではありません。そのため、医師不在期間中は、学生がこの電話で下界の医師に指示を仰いで対応します。また、毎日1回診療所の状況について下界の学生と情報を共有し、不足物資や学生の無事を確認することは、登山者の安全を確保すると共に、私たちの活動を継続させていく上でとても大事なことだと考えています。今回の診療期間中に計 1,220 度のテレホンカードを使用し、そのうち 1,050 度分を補助していただきました。

以上の物資により、三俣診療所での治療の幅と質が一層向上しました。しかし、昨夏は道中で熊の出現が相次ぎ、けが人も出ており、まだまだ対処しなければならない課題があります。今後も、定期的に学生たちで勉強会を開くなどして知識を広げ、思わぬ事故や熊などの動物に遭遇した場合の対処の仕方を学んでいく必要があると考えています。

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

このプロジェクト事業を実施したことにより、一層三俣診療所における診療活動を充実させることができ、より良い医療を提供することが出来ました。登山中の緊急事態に備えた対策や診療所の環境を整備することにより、予想外の事態が起きた時に迅速に対処することが出来るようになり、多くの登山客の更なる安心、安全につながると考えています。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

北アルプスには他大学が運営する診療所がいくつも存在します。診療所の活動を通じて他大学の人との交流を深め、刺激をもらって多様な視野を得ることが出来ました。

また、十分な医療設備が整っていない診療所において、まだ学生である私たちが実際に医療行為を見学し、可能な範囲でその補助をするという貴重な体験をすることができ、医学生であるという自覚を改めて感じました。また、その限られた器材を用いて診療に当たる医師や看護師たちをみて、医療の原点は患者さんと真剣に向き合うことにあると気付かされました。今後、医師として医療現場に立つことになる私たちにとって、夏のボランティアの診療活動に参加することはとても有意義なものでした。

6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

反省点としては、今回チェルトを購入するにあたり中に引くマットを一緒に購入しなかったことです。そのため、一時的に避難する場所としては有用でしたが、不安定な場所や岩や雪がある所では使用することが出来ませんでした。チェルトの用途をさらに広げるために、この点は今後改善しなければならないと思いました。

今後の計画としては、登山における事故や怪我を少しでも減らすために日頃から勉強会を開くことで知識を共有し、話し合っていくことです。山荘での限られた器材を使って、私たち学生がボランティアとして出来ることを更に拡充させていきたいと思っています。

7. 実施メンバー

代表者 鬼頭 里佳 (医学部 3 年)

構成員 兵頭 俊紀 (医学部 5 年)

谷本 慧太 (医学部 4 年)

荒木 健 (医学部 4 年)

濱田 康宏 (医学部 4 年)

山木 妙夏 (医学部 4 年)

廣地 希 (医学部 3 年)

香西 勝平 (医学部 2 年)

似吹 達弥 (医学部 2 年)

藤原 佳代子 (医学部 2 年)

露口 悠太 (医学部 1 年)

鷺尾 恵梨 (医学部 1 年)